

カリキュラム・マネジメントを充実させる校内研修

——研究授業を通したルーブリックづくりを中心にして——

胤森 裕暢*・波多野 徹**・杉原 慶一***

1. はじめに—問題の所在—

学校現場はその教育課程を開いて、カリキュラム・マネジメントを行い、未来社会に生きる力を生徒に育成することが求められている。また、学習指導要領により「学校教育に関わる様々な取り組みを、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施・評価し、教育活動の質の向上につなげていくこと」¹⁾とされるカリキュラム・マネジメントは、生徒に学びの量だけでなく質も保証しようとするものとも考えられる。さらに、生徒に学ぶ手応えを与えながら、保護者や地域にもよい影響を与え、「地域とともにある学校づくり」を進めることにまでつながる取組も考えられる²⁾。こうしたカリキュラム・マネジメントを、学校の主体的で創造的な取組として、「授業や学習を子ども自身のものにするための本来の授業や学習のあり方を追究すること」³⁾と捉えるなら、それは教師たちにとっても本質的で魅力あるものといえる。

従来も学校には「教育課程経営」すなわち、「各学校において教育諸条件を適切に整備することによって教育課程の編成、実施、評価の一連の過程を組織し、実行する創造的、技術的営み」が期待されてきた⁴⁾。にもかかわらず、これまで教育課程編成について教師たちの意識にのほりにくかったのは、「学校教育課程を構成する要素が複雑多岐にわたり、教育課程の点

検・評価の手順や作業が複雑なために、構成、実施、評価を関連づけて把握することがきわめて困難だから」、すなわち日々の授業実践と結びつけて捉え難いからだとされる⁵⁾。

従って、これから現場で取り組むことになるカリキュラム・マネジメントは、教師たちの学校改善への意欲と、指導と評価の一体化を意識した授業実践をふまえて行うことが重要になると考えられる。

こうして考えるならば、自分たちでカリキュラムをマネジメントする力、自校の魅力的なカリキュラムを実践を通して開発してゆく力が、現場の教師たちにはますます求められるようになると考えられる。

では教師たちがカリキュラム・マネジメントを実践し、その力をつけるにはどうすれば良いのだろうか。そのための校内研修、特に研究授業を活かすことが出来るのではないか⁶⁾。従来、教師たちの授業づくりの力は、全教師の参画する研究授業やその後の研究協議会における「広がり」と奥深さのある評価を通して育てられてきたからである⁷⁾。

校内のすべての教師にとり大きな意義を持つよう工夫された研究授業とその評価のための協議会を通すことで、広がりや深まりのあるカリキュラムづくりが進み、教師や学校の力量形成にもつながっていくと考えられるのである。

では基本的に、どのような研修の場と内容を用意すればよいのか。どう具体的に計画すれば実践出来るだろうか。

これらの問いに対する考察を進めるために以

* 広島経済大学教養教育部教授

** 前広島県立三原東高等学校校長

*** 広島県立三原東高等学校教諭

下では、まずカリキュラム・マネジメントを充実するために授業実践を評価する意味を整理する。次に研究授業を通して、自分たちの実践を評価するループリックを全員でつくり、カリキュラム・マネジメントに活かしている校内研修の実践を分析してみることで、カリキュラム・マネジメントを充実させる方途となる校内研修のあり方について探っていく。

2. 評価の工夫によるカリキュラム・マネジメントの充実

今日求められているカリキュラム・マネジメントは、授業をその学校の子どもたちのものにするための「教育課程づくり、あるいは教育課程の編成、実施、評価の一連の教育活動」⁸⁾を抜きにしては成り立たず、その主体には学校長だけでなく、実施主体である学級担任や教科等担任である教師たちもいると考えられる。教師が自校の生徒たちに、何をどのように教えるか、どのような力を育てたいかよく考え、計画・実践してゆくことが不可欠となる。これを全教師が自律的に行えることが学校のカリキュラム・マネジメントを充実させるために重要となる⁹⁾。なおカリキュラム・マネジメントは、「できる限り適切かつ効果的なカリキュラムを絶え間なく創造する営み」とも考えられている¹⁰⁾。

ではどうすれば、全教師が主体として関わりながら、より効果的な自校のカリキュラムへと改善を続けてゆけるだろうか。

これに対しては、授業による教育効果の評価を、カリキュラムづくりとつなぐ考え方が手がかかりになる。今日、学習評価とカリキュラムをつなぐことは、カリキュラム研究において「新しくもあり、また喫緊のもの」となっている¹¹⁾。

安彦は、教師の力量向上も含めたカリキュラムづくりを求めており、①教師が主体となりカリキュラムづくりを行うこと、②カリキュラム

の実施過程である授業中や授業後の教育効果を評価して行うこと、③研修プログラムをつくり行うことを提案している¹²⁾。

また、ウィキンズとマクタイは、カリキュラムを「トピックや題材を精密に計画することにとどまらず、ゴールを達成するために用いられる最も適切な経験、学習課題 (assignments)、評価方法を特定するもの」と捉え「真正の評価」を可能にするカリキュラムへ改善しようとする「逆向き設計論」(「第1段階：求められている結果を明確にする」、「第2段階：承認できる証拠を決定する」、「第3段階：学習経験と指導を計画する」)を提案している¹³⁾。彼らは、「求められている結果」から導き出される「学習のための特定の青写真」としてのカリキュラムを教師が設計するために、「学習者が学習ゴールを達成するために何をしなくてはならないかについて、最初に考慮」するよう求める¹⁴⁾。この理論を西岡は、4段階にまとめ直している¹⁵⁾。それは「単元設計にあたり『求められている結果』(目標)を設定する」第1段階。「『求められている結果』が達成できているかどうかを確かめる上で『承認できる証拠』(評価方法)を決定する」第2段階。「『求められている結果』『承認できる証拠』に対応できる学習経験と指導を計画する」第3段階。「単元設計(ミクロな設計)と長期的な指導計画(マクロな設計)を往復させながら、カリキュラム全体の改善を図る」第4段階である。

では、こうした安彦の提案や「逆向き設計論」などを理論的な手がかりにしなが、どのように校内研修を実施してゆけばカリキュラム・マネジメントの充実につながるだろうか。その実践的な工夫点を得るために以下では、カリキュラム・マネジメントの充実を目指し、全教師が参画できるよう工夫し、授業実践の評価の改善に取り組んだ校内研修の事例を取り上げ分析していく。

3. ルーブリックをつくるための研究授業を組み込んだカリキュラム・マネジメント研修—三原東高校による校内研修の計画と実践—

3.1 カリキュラム・マネジメント研修の実践と成果物

3.1.1 実践された研修の概要

広島県立三原東高等学校（波多野徹校長，教職員数35名，3学年10学級）は，県東部の三原市街にある全日制普通科高等学校であり，同校の教務部研修担当の杉原慶一ら研修担当を中心に以下のカリキュラム・マネジメントに係る研修を計画・実施した¹⁶⁾。なお，研修の指導助言者は，胤森裕暢（同校の学校運営協議会委員長）であった。

① 「育てたい生徒像」と「育成したい資質・能力」の整理

平成29年8月28日（水）16時00分～16時55分（55分間）の教科主任会議で，「育てたい生徒像」と「育成したい資質・能力」を整理した。

②－A カリキュラム・マネジメントの理論と事例の理解

平成30年1月18日（金）14時35分～16時50分（135分間），指導助言者が生徒の実態を把握するために6限の授業を参観した。その放課後，

カリキュラム・マネジメントの理論と事例について管理職，担当者，希望者が講義を受け，これから「総合的な学習の時間」等のルーブリックをつくり評価し，生徒の自己肯定感を高めていく必要性を共有した。

②－B カリキュラム・マネジメントの理論と事例の深い理解

平成30年2月8日（金）16時00分～16時55分（55分間），全教師が指導助言者の講義「求められていくカリキュラム・マネジメントと工夫の実際」を受け，パフォーマンス課題とルーブリックによる評価の理解を深め，生徒の自己肯定感を高めるために，パフォーマンス課題とルーブリックを活用した評価の改善をしていく方針を確認した。また教科横断的な「総合的な学習の時間」の授業は，各学級2名の教師で行っており，全教師がカリキュラム・マネジメントに参画できるため，この授業のルーブリックをつくり評価の改善をしていくこととした。（なお，令和元年度入学生から「総合的な探究の時間」。）

③－A 各学年の「総合的な学習（探究）の時間」（以下，「総合」）のための単元ルーブリック作成

令和元年8月6日（火）13時35分～15時35分（120分間）に，各学年で予定する「総合」の単元についてルーブリックを作成することを研修

表1 三原東高等学校のカリキュラム・マネジメント研修

パート	実施時期	実施内容（形式，参加対象者）
①	H29年8月	「育てたい生徒像」と「育成したい資質・能力」の整理（協議，教科主任）
②－A	H30年1月	カリキュラム・マネジメントの理論と事例の理解（講義，担当者）
②－B	H30年2月	カリキュラム・マネジメントの理論と事例の理解（講義，全教師）
③－A	R元年8月	夏期休業明けに各学年で実施する「総合」の単元ルーブリック作成（グループワーク，全教師）
③－B	R元年10月	「総合」の研究授業の実施（観察，全教師）
③－C	R元年11月	実施した「総合」の単元ルーブリックの検証・改善（学年別グループワーク，全教師対象）
④－A	R1年11月	ルーブリックを活用した教科（国語，地理歴史，理科，英語）研究授業の実施（観察，全教師）
④－B，B'	R2年2月（2回）	各教科研究授業で活用したルーブリックの実践発表と評価（ポスターセッション，全教師対象）

課題にして、全教師が次の研修をした。

a まず、全教師が指導助言者による講義「カリキュラム・マネジメントのための評価の手法—ループリック作成を通して—」を受けた。b 次に学年毎に、KJ法を用いて「総合」の単元で生徒に身につけさせたい資質・能力を整理した。c そして、単元のA基準とB基準（評価規準）を定め、評価表（ループリック）を模造紙に書き出した。d 最後に、全体に発表して各ループリックの工夫を共有した。e まとめとして、「総合」の授業では、単元のはじめの時にループリックを生徒に提示することと、まとめの時にそれによる振り返り（評価活動）を行うことを確認した。また次回研修では、ループリックによる評価の検証と改善を行うことが予告された。

③-B 「総合」の研究授業の実施（観察、全教師）

令和元年10月、各学年の「総合」において、

校内研修で作成したループリックを、授業実施前に生徒に配布し、それを活用した研究授業を行った。

③-C 各学年が実施した「総合」単元のループリックの検証・改善

令和元年11月22日（金）16時00分～16時50分（50分間）に、各学年が実施した「総合」単元のループリックを検証・改善することを課題とし、全教師が次の校内研修に取り組んだ。

まず各学年会で、生徒のワークシートや学習活動の様子を「手応え」と「課題」の観点で整理し共有し（表2）、ループリックによる評価を見直し、前回の研修で作っていたループリックを修正した。次に指導助言者が講義「評価の工夫による目標と指導の改善～ループリックによる『総合』の評価活動を通して～」と講評を行った。また次回研修では、教科代表者の研究授業で活用されたループリックを紹介する予告をした。図1と図2は、この研修の様子である。

表2 研修で出された手応えと課題

手応え	<ul style="list-style-type: none"> ループリック評価を可視化し授業前に示すことで、教員は生徒に身に付けさせる資質・能力を意識して指導を行うことができ、生徒は何を頑張ればよいか分かった上で授業を進めることができた。 ループリック評価を各学年の教員全員で作成することで、授業前に指導内容や大切にすることを共有することができた。 教室に貼ってあるループリック表を立ち止まって見ている生徒や互いに声掛けをして意識をしている生徒たちがいた。 「おもてなし」などのキーワードにすると、生徒に良く伝わっていた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 校内研修が無ければ、毎時間の前に担当教員が集まって評価表を作るのは難しい。 生徒の自己評価と教員による他者評価に差があり、生徒は未だ自分の学習内容を客観視することが難しいと感じた。 生徒に自己評価させる際には、問いを投げかけたり、自己評価する根拠まで記入させたりする工夫が必要と感じた。



図1 研修の様子 a



図2 研修の様子 b

④- A ループリックを活用した教科研究授業の実施（観察，全教師）

令和元年11月，国語科・地理歴史科・理科・外国語科の授業においてループリックを活用した研究授業を行った。

④- B, B' 教科代表者によるループリック評価表を用いた授業実践事例の発表

令和2年2月19日（水）16時15分～16時40分（35分間）と同月21日（金）16時00分～16時55分（55分間）の2回にわたり，「教科代表者によるループリック評価表を用いた授業実践事例の発表」を共通する課題として研修した。1回目は授業実践の発表を行い，2回目はポスターセッションと講義を行った。

1回目の研修の大まかな流れは次のとおりであった。

a 今年度生徒の自己肯定感を高めるためにループリック評価を作成し，生徒の成長を見取ることを各学年で実施してきた概要説明を行い，bその後，アイスブレイクとして「輝く生徒の瞬間」について，学年会の中でペアトーク（2分間）をした。このねらいは，日々の活動の中で生徒の良さを見取った出来事を教員間で共有し，研修を前向きに実施することであった。c 授業実践の発表をした教科科目等は，国語科（古典B『伊勢物語』『東下り』），地理歴史科（世界史B「ヨーロッパ世界の拡大」），理科（地学基礎演習「SDGsに関するレポート」），外国語科（コミュニケーション英語Ⅱ「ガウディの建築物についての発表」）であった。（なお地学基礎演習は学校設定科目。）d 各授業者は，要点「授業概要」「ループリック」「手応え」「課題」に絞って，スライド提示しながら発表（3分間）した。

e 参加した全教師は，次の【問い】に沿った質問や感想を記入し，次回の研修に備えた。

○自己肯定感や自己有用感を高めるには？

- 学習意欲を高めるには？
- 達成感や充実感を得るには？
- 基礎学力を定着させるには？

f 最後に，次回（2回目）研修に向けて，ループリックによる評価について意見や質問を付箋に記入し研修担当に提出して終えた。その意見や質問事項を研修担当が集約し，指導助言者に伝え，2回目の研修で助言を求めた。

2回目の研修は次のとおりに行われた。

a 1回目を振り返るため，【問い】に沿った意見交換を実施することを確認した。bその後，「輝く生徒の瞬間」について，1回目とは別の教員とペアになりアイスブレイクをした。cポスターセッションのブースを1教室内に4か所設け，全教師は前半（10分間）と後半（10分間）に分けて，2ブースをめぐり議論することとした。ポスター内容は，先の授業実践の発表用スライドをそのまま貼り，各参加者は気づきや質問を付箋にまとめ，ポスターに貼り議論し合い，記録を残すこととした。

d その後，指導助言者による講義「研究授業を通じたループリックづくり～生徒の輝きを踏まえて～」と講評を受けた。（この中で，1回目の研修で出た意見や質問に対する回答も行われた。）e 最後に，来年度の研修では，各教科によるループリック評価を用いた授業実践と検証・改善を実施することを予告した。

図3と図4は，この2回目の研修の様子である。



図3 研修の様子 c



図4 研修の様子 d

3.1.2 研修の成果物—つくり出されたルーブリック—

① 開発された各学年会の「総合」のルーブリック

A 第1学年「魅力的な三原市にするために（課題発見・解決学習）」

第1学年会は、魅力的な三原市にするための課題を発見する単元のルーブリックを作成し、検証・修正をした（表3）。例えば、魅力的な三原市にするには地域の意見も必要なため、「イ

ンタビューに基づいて課題を挙げることができる」と修正した。またキャッチフレーズはグループ討議に基づいて作成するため、「話し合い内容を踏まえたキャッチフレーズを完成させることができる」に修正した。

B 第2学年「修学旅行・姉妹校来校に向けて」

2学年会は、修学旅行・姉妹校の生徒たちが来校時に交流するためのルーブリックを作成し、検証・修正を行った（図2）。例えば、おもてなしの基本の基準が個人により異なるので、おもてなしの基本を挨拶・心遣い・異文化の尊重と修正した。

C 第3学年「進路実現に向けて」

第3学年会は、志望理由書・自己推薦文作成のためのルーブリックを作成し、検証・修正を行った（図3）。

例えば、進路実現に向けて計画を立てるだけでなく、行動することにも言及し、「将来に向けてすべきことを述べることができる」が加筆

表3 第1学年「総合」ルーブリック

1年	課題を見つける	キャッチフレーズを考える	話し合う
A	インタビューに基づいて課題を挙げることができる。	人に伝わる魅力的なキャッチフレーズを完成させることができる。	人の意見を聞いて、自分の考えを修正・改善することができる。
B	解決のイメージを具体的に持って、三原市の課題を1つに絞ることができる。	話し合い内容を踏まえたキャッチフレーズを完成させることができる。	仲間と共にコミュニケーションをとることができる。
評価	ワークシート	ワークシート	話し合いの様子

表4 第2学年「総合」ルーブリック

第2学年会として「総学」で育てたい資質・能力	知識・理解	思考・判断・表現	学びに向かう人間性
本単元の学習活動で期待する姿 A	台湾の文化や風習について具体的に知ることができる	積極的に自分からコミュニケーションをとることができる	更に学びたいことや後輩へのメッセージを考え伝えることができる
本単元の学習活動で期待する姿 B	おもてなしの基本（挨拶・心遣い・異文化の尊重）を意識して行動できる	コミュニケーション（声かけ）をすることができる	相手や自分の良いところ、交流で分かったこと、感想を文章で書くことができる
評価	ワークシート	交流の様子（観察）	交流の様子（観察）、振り返りシート

表5 第3学年「総合」ルーブリック

3年	現状を分析し探究できる力	進路実現に向けて計画を立て、自分の意志を表現できる力	他者と協働してより良いものを創っていくことができる力
より望ましい姿(A)	進路先と自分の強みを関連づけて、より具体的に考えることができる。	将来(5年～10年後)の自分の姿・将来設計を述べ、今からすべきことを述べるができる。	他の生徒の志望理由を聞いて、アドバイスを与えたり、自分の志望理由をより良いものにしたたりできる。
生徒に期待する学習活動の姿(B)	自己理解ができている。進路先の特色を理解している。	進路先で自分が「やりたいこと」「目標」「学びたい内容」を述べるができる。	他の生徒の志望理由等をきちんと聞くことができる。
評価	ワークシート	志望理由書、面接	自己評価、観察

表6 国語科の授業者があげた手応え(生徒の輝き)と課題

手応え	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の古典に対する興味・関心が高まった。 ・生徒が自分の意見を書くことや発表することに対して抵抗が薄くなった。 ・他者を評価するために、他者の意見をしっかりと聞く姿勢が見られた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリック評価の精度に課題があり、多くの生徒がA目標を達成していた。生徒の実力を日頃から見取る必要がある。 ・ルーブリック評価の項目は、具体的な文言で生徒に理解しやすくする必要がある。 ・生徒が相互評価に慣れておらず、評価の根拠が不明確である。

表7 地理歴史科の授業者があげた手応え(生徒の輝き)と課題

手応え	<ul style="list-style-type: none"> ・複数のものごとの関係性を考えさせることができた。 ・一つの物事を多角的な視点から捉えさせることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と生徒の間で評価にギャップがある。 ・提示したルーブリック評価表を生徒が十分に理解していたかを検討する必要がある。

された。また、1文の中に含まれている内容を短文にし、生徒にわかりやすいように改善をした。

② 改善されていく各教科のルーブリック

A 国語科のルーブリック改善

「古典B」の伊勢物語『東下り』の単位において、パフォーマンス課題「修辞技法を使った和歌を創作し、歌会を開催してみよう」を設定し、ルーブリックを生徒に提示して和歌を創作し歌会を実施した。生徒はグループ活動において和歌の発表と生徒間の相互評価を行った。表6は授業者が挙げた手応えと課題である。

B 地理歴史科のルーブリック改善

世界史Bの「大航海時代」の単位において、パフォーマンス課題「もしあなたが、ラス=カ

サスの報告を読んだスペイン国王であるとしたら、賛成・反対どちらの立場をとるのだろう」を設定し、ルーブリックを生徒に提示し、生徒が相互評価・自己評価を行った。表7に示す手応えと課題から授業者は、「パフォーマンス課題のルーブリック評価表を生徒自らが作成することで、生徒自身が学習のポイントに気づくことができるのではないか」という仮説を立てその後の授業を実施した。

C 理科のルーブリック改善

学校設定科目、地学基礎演習の「地球の環境」の単位において、パフォーマンス課題「SDGsの目標のうち地球環境に関するテーマを選択し、解決に向けて私たちにできることを提案するレポートを書こう」を設定し、ルーブリックも提

示し、生徒はSDGsに関するレポートを作成した。計8回の授業で生徒はレポートを、パソコンを用いた教員との対話を通して作成し、中間、最終の提出後、自己評価と教員評価を行った。表8は授業者が挙げた手応えと課題である。

D 外国語科のルーブリック改善

コミュニケーション英語Ⅱ「Gaudi and His Messenger」の単元において、パフォーマンス課題「ガウディの建築物について英語で発表しよう」を設定し、ルーブリックを生徒に提示して口頭発表を行い自己評価と相互評価を実施した。表9は授業者が挙げた手応えと課題である。

3.2 実践されたカリキュラム・マネジメントに係る校内研修の工夫

① 連続性のある計画

教務部研修担当の計画・実施したカリキュラム・マネジメントに係る校内研修(表1)は、まず「自校が目指す生徒像」と「育成したい資質・能力」を整理し(①)、その育成のためのカリキュラム・マネジメントのあり方と進め方を学び(②-A, B)、その考え方により、自校のカリキュラム・マネジメントの要として、「育成したい資質・能力」を育てる「総合的な探究

の時間」の授業を評価する工夫(ルーブリック作成と授業実施、その検証・改善)を行い(③-A, B, C)、そこでの課題意識をもとに、各教科の授業を評価する工夫(ルーブリックを活用した研究授業実施、そのルーブリックの評価)も行った(④-A, B, B')。

このように本研修計画は、教師によるカリキュラム・マネジメントのためのルーブリックづくりを組み込んでおり、大きくは「逆向き設計論」の流れに沿って実施された。ここには、先に研修したことが次の研修に活かせる工夫がされており、連続性がある。

② 校内研修を深化・発展させる研究授業

この連続的な校内研修を、ルーブリックづくりという具体的で発展的な内容へと発展させることができたのは、課題解決型の研究授業を組み込んだことによると考えられる。自校の生徒の自己肯定感を高めることを大きなテーマとしつつ、学習評価の改善、具体的なルーブリックの開発を課題とした研究授業を設定することで、そのためのグループワーク、授業実践を活かしたルーブリック改善のためのポスターセッションが成立していたと考えられる。

表8 理科の授業者があげた手応え(生徒の輝き)と課題

手応え	<ul style="list-style-type: none"> レポート完成までのルーブリック評価表があるためレポート完成までの流れを俯瞰しやすく、スムーズに作成していた。 ルーブリック評価表と進捗状況を照らし合わせながら、対話を通してレポートの方向性を決めることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリック評価表の項目の表現がわかりにくい。 生徒個々のレポート作成進度に差があり、レポート完成時のルーブリック評価表だけでは1回の授業でどこまで到達できればよいか示すことができている。

表9 外国語科の授業者があげた手応え(生徒の輝き)と課題

手応え	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリック評価を提示することで、生徒に目指すべきゴールをイメージさせ、意欲的に発表に取り組ませることができた。 相互評価をさせることで、集中して発表を聞かせることができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 評価項目の表現が抽象的であった。 相互評価において、項目を全て十分に評価しきれていない生徒がおり、項目を精選することが必要であった。

③ 全教師が主体的になるためのループリックづくり（グループワーク、ポスターセッション）

研修内容のほとんどが、全教師の主体的な参画を実現するものであった。当初の研修で、自分たちが求めている生徒の姿や資質・能力を整理し、そのためのカリキュラム・マネジメントの必要性和方針を共有した後に、評価を改善する具体的な手立てとしてのループリックづくりを緊要な課題として共有し続けた。比較的短い研修時間内に、グループワーク（含む発表と講評）、ポスターセッション（含む講評）を組み込んで、ループリックの改善・開発ができていく。

4. カリキュラム・マネジメントを充実させる校内研修のあり方—三原東高校の校内研修を手がかりに—

4.1 連続的で深化・発展的、主体的な研修の場の設定

三原東高校では、カリキュラム・マネジメントに教師皆が参画できるように、毎回日々の授業改善につながる校内研修をワークショップ型で行っていた。そこでは、自校で育成したい資質・能力を整理し、授業改善の手段、学習評価について全員で学び丁寧に考え、それを具体化する研究授業と、結果を全員で評価する場が適時積み重ねられており、教師たちの参画意識が保ち続けられたと考えられる。このように連続的で深化・発展的、主体的な研修の場を、年間を通して設定することが、カリキュラム・マネジメントを充実していく要になると考えられる。

4.2 全教師が参画でき、カリキュラム・マネジメントの起点となる実効的な課題の設定

また三原東高校の校内研修は、早い段階から自校の生徒に育てたい資質・能力を整理し、そこに向かって、全教師が自校のカリキュラムを

「逆向き」に設計していく起点となる、教科横断的な「総合」そして各教科のループリックづくりを課題として設定し続けていた。

研修課題が、すぐれた授業者であり、自校のカリキュラム開発者でもあるべき教師たちにとってより実効性を持つことで研修を推進していくことができると考えられる。

4.3 課題解決型の研究授業を組み込む

三原東高校において、カリキュラム・マネジメントの鍵となる評価のあり方（ループリックづくり）を、全教師が参画して構築できたのは、校内研修を重ねただけでなく、そこに学級担任たちによる「総合」の研究授業と、それを踏まえた、各教科担任による研究授業が組み込まれていたからと考えられる。

教師たちが各学年の「総合」単元でループリックを活用して研究的な授業をしたからこそ研修時のグループワークに参画できたと考えられる。また、さらなる改善を図ろうとする各教科の研究授業だからこそ、授業者も観察者も主体的に参画・関与観察して、その後のポスターセッションで主体的、批判的な議論ができたと考えられる。

5. おわりに—成果と課題—

本研究では、高等学校における研修実践を吟味することを通して、カリキュラム・マネジメントを充実させる校内研修のあり方を明らかにしてきた。それは連続的で深化・発展的、主体的な研修の場として設定すること、全教師が参画でき、カリキュラム・マネジメントの起点となる実効的な課題を設定すること、課題解決型の研究授業を組み込むことである。

本研究には次の課題が残されている。まず、課題解決型の授業研究を組み込んだ校内研修の成果を活かして、どのように具体的なカリキュラム改善を進めればよいのか、例えば、三原東

高校の実践のように、全教師たちがつくり出したルーブリックを次年度、いかに活用してカリキュラム改善を進めていけばよいのかについて明らかにすることである。次に、こうした校内研修を通じて、学校及び教師のカリキュラム・マネジメントの力量がどのように向上していくのかを明らかにすることである。

これらの課題については今後、校内研修に関する学校評価の内容や教師へのインタビュー等を通して明らかにしてゆきたい。

注

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』東洋館出版社，平成31年，p. 45.
- 2) 同書，p. 48.
- 3) 日本カリキュラム学会編『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版，2019年，p. 97.
- 4) 同書，pp. 90-92.
- 5) 天野正輝編『教育課程重要用語300の基礎知識』明治図書，1999年，p. 25.
- 6) 安彦忠彦編『特色ある学校づくりとカリキュラム開発』ぎょうせい，2004年，pp. 6, 8 参照.
- 7) 今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店，2012年，p. 182.
- 8) 前掲書6)，p. 94.
- 9) カリキュラムは計画だけでなく、実施や結果の

次元も含むものであり、「結果の評価」をどう行うかが考慮されねばならないとする考え方がある（前掲書6），pp. 6-7）。これに従えば、カリキュラムの実施主体である教師が、そのマネジメントに深く関与する必要性は高い。

- 10) 田村知子編著『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい，2011年，p. 12.
- 11) 前掲書6)，p. 223.
- 12) 前掲書9)，p. 9.
- 13) G. ウィギンズ／J. マクタイ著，西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』，日本標準，2012年，pp. 21-25.
- 14) 同書，pp. 7, 15, 17.
- 15) 同書，pp. iii-iv, 7.
- 16) 令和2年3月末現在.

参考文献

- 加藤幸次編『教育課程編成論』玉川大学出版部，2010年.
- 田中耕治，森脇健夫，徳岡慶一『授業づくりと学びの創造』学文社，2011年.
- 日本教育方法学会編『中等教育の課題に教育方法学はどう取り組むか』図書文化，2019年.
- 広島市教育センター『校内授業研究の充実～学校研究主題に迫るルーブリック～』，2016年.
- 松下佳代『パフォーマンス課題—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準，2007年.
- 三藤あさみ，西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか—中学校社会科のカリキュラムと授業づくり—』日本標準，2010年.